

翔の怒り

四月のある朝、翔のクラスに担任の佐藤先生が一人の背の高い男子と一緒に入ってきた。

「みんな、二年三組の新しい仲間を紹介します。」
一斉に男の子を見つめた。

「ブラジルから来たパウロ・ブルーノ・オリヴェイラ・ダ・シウバさんです。パウロさんは日本語がわかりません。だから、みんなの助けが必要です。仲良くしてくださいね。」

佐藤先生はそう言って、パウロに向かってほほえんだ。先生は翔の隣に机を持ってきて、パウロにそこに座るように促した。翔は自分の胸のあたりを指さしながら、パウロに言った。

「ぼくは、佐々木翔。」

パウロは少し首をかしげながら、

「シヨウ？」

と言った。

「そう、翔。パウロ、よろしくな。」

翔はそう言って、右手を出した。パウロは、はにかむような笑顔で翔をまっすぐ見つめながら、その手を握った。

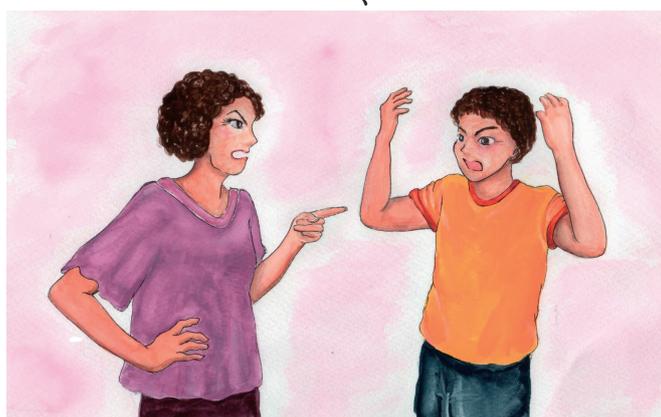
次の日から翔のクラスに、パウロに日本語を教える先生がやってきた。クラスのみんなも、とまどいながらもパウロをクラスメイトとし



て受け入れた。翔は隣の席ということもあり、パウロに物の名前や漢字の読み方を教えたりして、何かとパウロの手助けをした。パウロは人なつっこい性格で、すぐに翔や他の仲間と打ち解け、日本語の力も急速についていった。

「いつも、ありがとう。シヨウ、ぼくの、ともだち。」
パウロが笑顔でそう言うのと、翔の心にあたたかな灯が灯った。

三か月ほど経ったある夕方、翔は学校からの帰り道で、パウロが外国人の女性と激しく言い争っていることに気づいた。二人は翔の知らない外国の言葉で、互いに早口でまくしたてていた。商店街の真ん中で人通りも多かったが、みんな冷やかな目で見つめた後、素知らぬ顔で通り過ぎていった。翔はどうしようかと思っ立ち止まっていたが、結局、気にかかりながらもパウロに声をかけられないまま家に帰った。



夕食をとりながら、翔がその様子を母に話すと、母はため息をついてこう言った。

「その女の人は、たぶんパウロさんのお母さんよ。パウロさんのお母さんが、私が行ってる工場で働いているのは知ってるわね。」
翔はうなずいた。

「最初のうちは、工場の仲間もいろいろと世話を焼いていたんだけどね。パウロさんのお母さん、日本語が全然わからないのよ。覚えようという気もないみたいだし。それで、だんだんみんなも離れていって。工場長からも怒られっぱなしでね。私も気にしてるんだけど…。」
話を聞きながら、翔は腹が立ってきた。

「ごちそうさま。」
ぶつきらぼうにそう言うと、翔は自分の部屋に戻った。

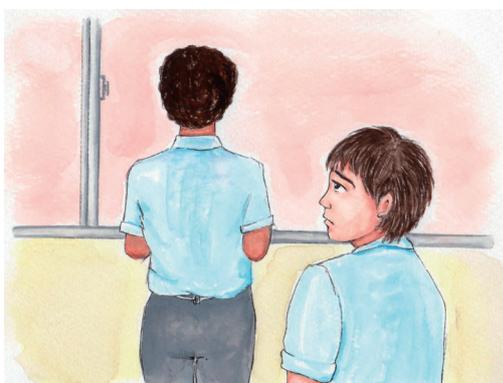
次の日、翔が教室に入ると、パウロが仲間の輪から離れて一人ぼーっと外を見つめていた。翔はパウロに近づいて話しかけた。

「どうしたの。パウロ。元気ないな。」
パウロは外を見つめたまま言った。

「母さん、『ブラジルに帰りたい。』、
言ってる。」

翔は驚いた。

「どうして。」



「母さん、日本語、覚えられない。ブラジルの言葉、好き、日本語、難しい。それで友だち、いない。仕事、行っても、いつも、一人。それで、日本、いやになった。」

パウロはそう言うと、翔を見つめた。昨日の夕方の光景や母の話を思い出した。

「ぼく、怒ってる。でも、とても、悲しい。」
パウロの眼にうつつら涙がにじんだ。翔はやり場のない怒りを感じながらも、何も言えずにその場に立ちすくんだ。

その日の夜、翔は自分の部屋でパウロについて思いをめぐらしていた。パウロとパウロのお母さんが、これからも仲良く日本で暮らすにはどうしたらいいだろう。難しい問題だけれど、きっと僕たちにできることがあるはず。クラスのみんなにも相談してみよう。だって、僕たちはパウロの友だちなものだから。